

『青森県史 資料編 近世 学芸関係』

源 了圓

この本は、A四判、本文八五八頁、附録一〇頁の堂々たる大冊である。現在の青森県域を越えて、岩手県盛岡までを射程に入れ、弘前・八戸・盛岡にまたがる「学芸」についての資料集である。南部領を含めるのは、その一部が今日の青森県に属するからである。さらに周知のように八戸領は南部盛岡藩の北部に位置するが、それは南部盛岡藩から分封されたのであり、その影響下にあった点から言っても南部藩のことも含めて考察した方が当時の実情に合う。そうしたことで初期の間は弘前・八戸・盛岡の三藩を含めて考察し、藩末になると盛岡藩は比較の材料として取り上げられている。

まず形式面からこの本の構成について紹介する。最初に編者の方からこの本の編集方針について説明があり、ついで担当者から各章にどういう資料を取り上げたかということが各藩毎にしるされ、それについて簡単に要領を得た解説がある。そして後の大半に膨大な資料が載せられている。そして解題の部にその資料を知るのに必要な文献、関係論文がしるされている。また各資料には、いつ完成したものか、どこに原資料が所在するかということが明記されている。収録された資料の大半は新出の完全な資料である。紙面関係でやむを得ず部分収録に止まったものについては、残りの分がどこに所在するか、何に収録されているか、明記

されていて、研究者にとって実に親切な工夫がなされている。また巻頭には十六頁に及んで各項目毎に関係人物、著書、図版、等がオフセット版で収録され、読者にとって難しい資料に接することが楽しくなるような工夫がなされている。

そして巻末に八頁に涉って、各章毎に収録された文献や口絵・図版について表題・史料名、所蔵先、請求記号を付した一覧表、及び弘前藩、盛岡藩、八戸藩における蘭学修業者の氏名、入門年月日（国元出発）、師匠名、家塾名を纏めた一覧表（表1から3）、広瀬淡窓の塾咸宜園への入塾者の津軽出身者の氏名、入門年月日、号、紹介者を記した一覧表（表4）、平田篤胤・鉄胤の気吹舎門人帳に名を連ねた当該地域の門人一覧表（表5）、津軽国学者関係書簡の一覧表（表6）が作成されており、われわれにはこれらの表からいろいろのイメージを豊かに思い描くことが可能である。これらの表を眺めているだけでも、地域と中央との緊密な関連の構図が自ずと浮かび上がってくる。

更に付け加えておきたいことは、一枚のコピー用紙の裏表に印刷された表である。表の上欄には、津軽・盛岡・八戸藩出身のこの本に登場する人物、また山鹿素行、荻生徂徠、太宰春台、宇佐美水、木村兼葭堂、平田篤胤、広瀬淡窓、東条一堂、佐藤一斎、吉田松陰、宮部鼎蔵、横井小楠、平田鉄胤、等のこの北奥州の人々と関係のあった人物の生没年の年表が載っていて、読者にとってこの地方の人々の歴史的位置づけがよく分かって便利である。下欄には方位時刻表、度量衡の表があつてこれまた便利である。裏には天正元年（一五七三）から明治五年（一八七二）までの西暦、天皇名、和暦、干支、が記載されていてこれまた実

に親切である。学問の裏づけがしっかりしていて、しかもこの浩瀚な資料を楽しんで読めるようさまざまな工夫があつて、この点から言ってもこの資料集は配慮が行き届いており、よくできている。

以下、この本を内容面から検討する。まず、この「学芸関係」の『青森県史 資料編 近世』の中での位置づけから述べることにする。普通の県史では文化史関係の資料集として、付随的に取り扱われるところである。それをわざわざ一巻として独立に項目を立て、しかも「学芸関係」というタイトルの巻にしたのはなぜであろうか。それを明らかにするには、構成を見ることによって編者の意図は明らかになるであろう。構成は以下のようになっている。

第一章 藩主の教養

第一節 弘前藩主

第二節 盛岡藩主

第三節 八戸藩主

第二章 藩士の言説

第一節 弘前藩士

第二節 盛岡藩士

第三節 八戸藩士

第三章 さまざまな学術知と思想

第一節 乳井貢の思想

第二節 知の広がり

第三節 算学と和算

第四章 国学の展開と幕末の北奥

第一節 津輕の国学

第二節 南部の国学

第五章 生活の知

第一節 武士の心得

第二節 農書

第三節 商家家訓類

すぐに気づかれるように、いわゆる文化史的アプローチは第四章「国学の展開と幕末の北奥」だけである。他はすべて思想的アプローチである。そのことは、全体の編集を代表し主に弘前・盛岡藩を担当したのが小島康敏（国際基督教大学教授 元弘前大学助教授）であり、八戸藩を担当したのが若尾政希（一橋大学助教授）であり、その両氏を助けたのが中村安宏（岩手大学助教授）らの諸氏であって、いずれも日本思想史の近世後期から幕末にかけての錚々たる研究者であることに示されている。この巻では地域研究のすぐれた多くの研究者たちが彼らを助けるという形になっている。恐らく他の通史的諸巻ではこの関係は逆のかたちになるであろう。

近世編全体の総編者の意図を推察すると、他の通史編の諸巻との関連を緊密にするには、文化史編という出し方では困難だという見通しをもったのであろう。しかし思想的アプローチさえすれば、問題はすぐ解決できるかという点、そうはいくまい。そこにはなんらかの工夫が必要であろう。そのような危惧の念が私に起こったのも止むを得ない。だが、各章の一つ一つの項目を検討していくうちにそのような危惧の念は氷解していった。そしてこの構成なら思想的アプローチで立派にやってい

ける。それどころか、政治や経済を中心とする歴史的叙述における出来事の連鎖は、その社会に生きた人々のどのような考えによって惹き起こされたのかという思想と歴史との問題史的関連に道が付き、その結果、実情に即した仕方では藩の歴史はいのちを吹きかえすのではないか、という思いが私の中で強くなったのである。

以下、この本のすぐれている点を列挙する。

1、弘前藩・八戸藩・盛岡藩という三つの藩にまたがって、従来ともすれば別々の地域史として分断的に研究されていたものを統一的に把握する研究体制をつくり、それが研究成果として生かされてきたこと。たとえば岩手県二戸市に属する吞香稻荷神社の稻荷文庫の本の貸借帳を中心とした、今日の青森・盛岡・秋田の北奥三県にまたがる知のネットワークという捉え方はそれなくしては発想されなかったであろう。

2、これまで政治・経済を中心とする通史の部分と文化史的部分とが相互に関係のない羅列歴史叙述となりがちであった県史、またその資料集を、思想的アプローチ、しかも藩主の教養・藩士の言説・學術知とその思想・国学の展開と幕末の北奥・生活の知という構成をもつものとしたために、内容的に統一体として把握する県史とすることに成功したこと。

3、これまで単発的に上杉鷹山研究とか、保科正之研究とか、細川重賢研究というようなかたちでとり上げられていた藩主の思想を「藩主の教養」とし、しかもこれを「藩士の言説」と一組にすることによって、藩の歴史の中で捉えるこれまでになかった方法をとったこと。

4、「知」を「学術知」と「生活の知」に分けることによって、知と社会の各層との関係が明確になるとともに、一つの思想が両方の層にまたがって知的活動をしている姿が構造的に明らかになったこと。

5、近世中期から思想的に「中央と地方」ということが大きな問題として出てきたが、あまりに大きな問題なので、散発的研究に止まっているものを、本格的に組織的に研究する模範的モデルを提供したと。

総じて、従来はともすれば周縁的な部分に追いやられがちな学芸関係史料を独立した巻として立て、そこに藩主の教養から庶民の生活の知にいたるまで、知の営みという点に焦点を合わせて構成したことは、これまでの地方自治体史においては例を見ないユニークなものである。思想史や知の社会史という、歴史学の新しい方向を強く意識しての編集であろう。掲載された個々の資料に目を通すと、近世の北奥社会において、知的な活動がいかに多彩にかつ豊かに展開されたかがよく分かる。知的営為という視点から地域の言説空間を見直すことが、これからの県史や市史のレベルにおいて求められて然るべきである。本巻はその先鞭をつけたものとして大いに意義のある内容となっている。

(A4判、八五八頁、青森県、二〇〇四年三月刊、定価五八八〇円)

(みなもと・りょうえん 日本学士院会員・東北大学名誉教授)